

広瀬隆エナジー、未だ衰えず

——広瀬隆著『日本の植民地政策とわが家の歴史』（八月書館）書評

木原省治（きはら しょうじ）

原発はごめんだヒロシマ市民の会

読み続けていくうち、だんだんと残りページが少なくなることを寂しく思う本に、久しぶりに出会ったという感じだった。だいたい読むペースの遅い私だけど、本書はまさにイッキという感じで読み終えた。

広瀬さんの著書は、「越山会へ恐怖のプレゼント」、「億万長者はハリウッドを殺す」、「クラウドゼヴィッツの暗号文」にしても、また「いつも月夜とは限らない」、「黒い輪—権力・金・クスリ オリンピックの内幕」しかり、題名の面白さユニークさとともに、推理小説のような身の危険性を感じさせる。そのことが全国に広瀬隆ファンが多い所以だろうが。

1986年のチェルノブイリ原発事故後に出版された「危険な話」は、この事故で盛り上がった原発反対運動に大きな影響を与え、特に女性層から読まれた。それは「広瀬隆現象」とまで形容され、原子力ムラからは「目の上のタンコブ」とされ、悪質な嫌がらせも行われた。私の手元には、たぶん電力会社かその関係団体が作成したと思われる「広瀬氏の論点」と題した、広瀬潰しの一覧表のようなものがある。

しかし広瀬さんは「ノホホン」という感じで、特に気にすることもなく福島原発事故後も「活動的作家」として存在し続けている。その理由、ルーツはどこにあるのだろうか興味深々だったが、本書からほんの一部というかヒントになる部分が見えてきたように思われた。

自身が幸運だった理由を三つ挙げているが、その一つ目に次のように書いている。「私の母方の祖父・野々村謙三が、朝鮮で莫大な富を築いた人間でありながら、1945年の日本の無条件降伏によって無一文に落ちぶれてくれたことの幸運である。その結果、当時のほとんどの人と同じように、戦後のわが家も必死に生きなければならない貧乏人であってくれたのだ。もしわが家が、わずかでも過去の植民地支配の富に頼って、戦後の生活を出発させていたなら、私の人生は、絶えず罪の意識にさいなまれただろうが、幸いにも貧しかったので、そうした負い目をまったく持たずに、自由な思想で、今日まで生きることができた」と。

普通感覚では、大金持ちから無一文になることは、まさに地獄に落とされたような気持ちになるものだろうが、それを「幸い」とするのが、広瀬さんの決して強がりではない『らしさ』なのだろう。

そして広瀬さんはサラリーマンや翻訳家などを経て、主に原子力に反対する運動を広げる作家としての活躍するのだが、その場の生の体験を貪欲に自らの行動に基づく知識として、そのファイルを積み重ねていくところが素晴らしい。

また広瀬さんは自らを『「大学の学歴」を無視する人間で、すべての肩書を嫌う人間である。』と本書の中でたびたび書いていて、『(わたしは)早稲田大学の理工学部の卒業生であることは、間違いない事実なのである。つまり間違っただけで大学を卒業したにすぎなかった人間であるが、…』としている。広瀬さんの基準（尺度）は、あくまでも今何をしているかである。

原爆投下後に広島に降った「黒い雨」、同名の小説を書いた広島県出身の作家井伏鱒二さんとは家族ぐるみの付き合いがあったという。広瀬さんの親戚にも原爆による犠牲者がおられるということで、広瀬さん、私、井伏鱒二さんにつながる線というか、因縁をも感じさせてくれた。

「出る杭は打たれるが、出過ぎた杭は打たれない」、本書は「負を正に」、「諦めを希望に」変えるエネルギーを与えてくれる。しかしそこにあるのは、決して強さだけではない、あふれる優しさがある。最後に書かれている短編と童話が、その二つことを端的に表現しているだろう。

最後ページには、広瀬さんの40年間の活動の中で、繋がりのあった人で既に亡くなられた人61人の名前を挙げ、最後の1行には「この人たちに一輪の花をたむけるのは、心の中だけでよい。

それより、行動だ。行動だよ！！」と。この最後の「よ」という言葉、広瀬さんの話しぶりが、目からと同時に耳からも入ってきた錯覚に感じられた。

「広瀬隆エナジー、未だ衰えず」である。